

俳句の風景

①とんぼの群

川名ますみ（川崎）

信之先生、正子先生、緑蔭ネット句会をありがとうございます。ございます。洋子さま、いつもお世話になりました。恐れ入ります。皆さまの御句に触れ、梅雨明けの心地好さもひとときの楽しいひとときを過ごさせて頂きました。

また、この度は「とんぼの群れ」の句へ、思い掛けず金賞を賜りまして、驚きつつも大変嬉しく存じます。これを励みに精進致します。

先日、山梨の通院の帰路、サービスイリアで休息しました折に、とんぼの群と出遇いました。人に逃げる気配もなく、触れられそうでしたので、母に車椅子を押して貰って群へ入り、肌^{はだ}に羽を感じる事が叶いました。幸せな体験が、句会に参加させて頂いたおかげで、尚更、大切な記憶になりました。

同句へ特選を賜りました、信之先生、正子先生、貴重な選を頂戴しました、有花さま、裕子さま、睦さま、恵子さま、智久さま、宏さま、美知子さま、お礼申し上げます。正子先生のご講評を、有難く拝読しました。勉強致します。

車椅子とんぼの群へ触れに入る　　ますみ

「触れに入る」がすばらしくよい。とんぼの群れに、自ら入り、とんぼと同じように交わることに純粹な喜びがある。(高橋正子)

栄太郎さまには「青蘆の波を夕日の辿りけり」を、秀之さまには「両壁に凌霄花赤き山道へ」の句をお選び頂き、ありがとうございます。どちらも、山梨通院の道中の景色です。

何があつても、俳句を学んでいけば、自然を隔てることがない。自然と繋がっていれば、抛り所を失うこともない。初学の浅い考えですが、感謝しております。

②秋深む洛西

桑本栄太郎 (京都)

コスモスの彼方に夕日入りにけり

もうそろそろ金木犀の花が咲き、あの心地良い香りがしているのではない、夕方早めの三時半頃散歩ウオークに出かけた。

いつもの住宅街を抜け、真っ直ぐ山の方へ上り山すそ伝いに、村中を歩いた。住宅街を抜ける頃から金木犀のたおやかな大人の女性を思わせる香りがして来ていたが、山すその古民家、新興住宅、お寺等を辿る小路は、何処にいても金木犀の香りがしていた。こんなに強い芳香性のあるものかと認識を改めた。

秋の季語に「花野」「花野道」「夕花野」などあり、

秋の花の咲き乱れた様子を言うのだが、まさに今の時季で今日見た花は、彼岸花（朱、白）、芙蓉（白、ピンク）、酔芙蓉（八重）、コスモス（白、ピンク、紫、黄）、百日草、萩（白、紫）、虎の尾、赤のまま、白粉花、野菊、泡立ち草、藤袴の蕾、などなどその他沢山。

春に咲く花は日照時間が長くなれば咲いてくるが、秋の花が咲くのは気温が下がってからではないかと気づいた。今年は厳しい残暑が続き今頃、彼岸花、コスモスが盛りとは驚きである。

③幼稚園運動会

高橋秀之（大阪）

運動会園児の歓声高らかに

秀之

遠足だ秋のもみじを見に行こう

成哉

（小五）

運動会かけっこダンスつかれるな

博己

（小三）

うんどうかいこてきたいこはたのしかったね

周也

（幼年長）

十月二日は、気持ちいいくらいの秋晴れの一日。幼稚園の運動会でした。先週録画した小学校の運動会のビデオ。今週はずっと忙しく帰りが遅かったので、朝からダビング。

嫁さんは朝四時から起きてお弁当の準備。準備万端で、なるっち年少のときから数えて八回目。幼稚園最

後の運動会に臨みます。

幼稚園の運動会の保護者席の配置は抽選。今年は、二番くじで本部席横の二列目が当りました。ポジションングは抜群！。しゅうくんは前から三列目なんで、よく見える位置だし、しっかりと応援してきました！。かけっこ、早かった？。お遊戯（花笠音頭）、すごく上手でした。組み体操、頑張っていました。綱取り競争、要領のよさが（笑）

親子競技は私とペア。最後の肩車でグラウンドを一周。これが毎年の恒例行事。なるっち、ひろっちに続いて三度目も、これが最後かと思うと感慨深いものが。（泣いているお母さん方もいらっしやいましたから）さて、これで大きな行事もひとつ終わりました。後は、音楽発表会と卒園式です。

④ 来島海峡の秋

柳原美知子（今治）

秋晴れの日、自然と足が海へ向く。来島海峡の真青な海と空と島々を見渡し、潮の香を嗅ぎ、海風に吹かれれば心身ともに蘇る。四季折々の来島海峡に最も間近に触れられる絶好の場所は、「海の見えるカフェ」。マスターご夫妻の自宅続きのガラス張の明るい店は、来島海峡第三大橋の橋桁がすぐ西に迫り馬島、大島を眼前に望む崎の上に建っている。来島海峡は世界で唯一、潮の流れによって航路が変わる難所であり、順潮

時（潮流の流れと同じ方向に航行する時）は中水道、逆潮時（潮流の流れと反対方向に航行する時）は西水道を航行することになっている。「海に見えるカフェ」からは、西水道や中水道の狭水道を航行する一日千隻余の船を眼前にし、日本三大急潮の一つである来島海峡の最大十ノットにも及ぶ潮流を眼下にすることができ。十月になったばかりの崎は晴れわたり、テラスのマスターお手製の木のベンチに座ると、激しい潮流が美しい藍色の濃淡の潮目をくつきりと見せて、西へ西へと流れていくのが見える。

干潮であるらしい。マスター夫人がコーヒーを運んで来てくれると、どこからか小鳥の声がして、素早く夫人の腰につけていたひまわりの種袋を啄み始めた。夫人は笑いながら、数粒の種を私の掌にのせてくれた。するとそのふっくらとしたオレンジ色の黒い羽をした小鳥は、ためらいもなく私の掌に止まり、キョトキョトしながら種を食べ始めた。その仕草が可愛らしく、次々と同席していた息子と夫の掌や肩に止まった。思いがけない小鳥との出会いの楽しいひとときだった。

小鳥来る崎の潮目の濃き流れ